

日本基督教団 東中国教区ニュース

NEWS

東中国教区
教区ニュース誌委員会
〒100-0065
倉敷市鶴形一丁目十五
倉敷キリスト会館内
TEL 086-422-1780

説教

わたしは主を見ました

八頭教会 牧師 赤川 祥夫

聖書 ヨハネによる福音書

二十章十一〜十八節



今こそすべての
の人が復活の主
に出会い、闇に
閉ざされた社会
が光に満たされ
なければならな
い。マグダラのマリアが復活の主に出会っ
て光と解放に満ち溢れたように。

マグダラのマリアは取り去られたイエスの遺体を捜していた。イエスが「マリア」と呼ぶとマリアは振り向いて「ラボニ」と言った。するとイエスは「私にすがりつく

のはよしなさい。まだ父のもとへ昇っていないのだから」と言った。イエスはいつまでも「私の主」とか「私の先生」とか考えている人間の思いを捨てよと言われたのだ。逆に言えば「言が肉となって」わたしたちの間に宿られた「神の子」は傷だらけになり体中から血を流して惨めな肉の姿をさらして死んでいった。そこにこそ神の栄光が表されている。だがそれをきれいに洗って血をぬぐって美しい遺体になってもらおうとするマリアの思いには自分の理想を神とする偶像崇拜があるのだ。だから「私にすがりつくな」という一言でイエスはそのことをマリアに教えたのだ。

その時マグダラのマリアに主イエス・キリストから第一の使徒としての使命が与えられた。マリアは弟子たちの所へ行って「私は主を見ました」と告げた。この時マリアは主にすがりつくこうとする自分の思いから解放された。

「わたしは主を見ました」と告げること

目次

説教「わたしは主を見ました」	1
「まぶくら」閉所にあたつて	2
「カルト」についての学習会」報告	4
「教師と信徒の合同研修会」報告	5
二・一集会（平和集会）報告	6
教会紹介「児島教会」	7
按手礼式・編集後記	8

は、自分の思いを遙かに超えて、自分の能力や性別や地位によらず、ただ主イエスの福音を宣べ伝えているということだ。「言」そのものである方が福音の主体であり、彼女はその方に器として用いられているだけだ。しかしいまこそ彼女は何者からも自由になっている。遺体に執着する思いは愛のようであって愛ではない、それは神の愛と真逆の人間の罪に他ならない。

「わたしは主を見ました」というのは、「あなたも主を見ることが出来る。復活の主と出会うことができる」という告知に他ならず、主がすべての人の救いとなられたという告知でもある。

世界は飽くなき成長と、地球資源と人を滅ぼすあり方とを脱することが出来るのだろうか。二〇二一年がその脱成長社会の始まりの年であることを心から願っている。それが主イエスの救いだからだ。

『まびくら』 閉所にあたつて

『まびくら』が はじまり終わるまで

まびくら運営委員 中井 大介

二〇一八年の西日本豪雨災害によって壊滅的被害を受けた真備町で七月十二日に東中国教区は自ら被災しつつも地域と人々の生活再建のために力を注ぐことといたしました。翌十三日に超教派による「岡山県宣教の集い」

から大塚忍議長の陪席要請を受け、ここに「岡山キリスト災害支援室（岡キ災）」が



まびくら閉所記念コンサート

設置され、連日の酷暑の中で現地の被災家屋清掃と傾聴活動が続けていきます。九月半ばになると仮設住宅への移住が進められるようになります。そうした中で東中国教区は避難所が解散した後も被災者がお互いにつながりつづける場所が必要だと考えていました。岡キ災もYMC Aせとうちも復興期のコミュニティ再生事業に携わる意志を持っており、ここに東中国教区、岡キ災、YMC Aせとうちの三者を中心として真備町に復興拠点施設を設置する判断をしました。

この時期の真備町にはいくつもの課題がありました。多くの命が失われ、資産の喪失に痛み、夜間の居住者もおらず窃盗事件などで治安が悪化していました。デマやうわさ話や間違った情報が混在していました。しかし、真備町の復興支援に関わり続けていると、ここに生まれ育った人や地域でのかけがえのない共同体を形成してきた人々と出会い、本心では真備町に戻りたいと考えている人々とのつながりができていました。私たちはそのような方々と出会い、真備町が再び生活の明かりの灯る、暮らしを

大切にしながら過ごせる故郷として回復していく活動をしたいと願い、その象徴として「まびにくらしのぬくもりを」回復することを目的として拠点施設「まびくら」を設置しました。この施設の最初の活動は夜間に建物内部と外観をLEDライトで灯し続けるというものでした。真備町が被災してから真暗闇の夜が続いていたのですが、少なくとも人の活動とその気配を示す灯火が夜間も輝き続けることで、人の暮らしを取りもどす意思を表明していこうという決意でした。

その後まびくらはサロン活動を中心に、生活物資の集配、岡キ災による仮設住宅支援やYMC Aせとうちによる子どもプログラムなど、交流の場所として多様な方々に利用していただきました。新型コロナウイルス感染症の流行により活動が限定された時期にもなりましたが、痛みを負う人の傍らで祈り居続ける働きとしても「まびくら」は全うされました。

東中国教区のみなさまにおいては尊いお祈りと温かいご理解を頂き心より感謝申し上げます。

「まびくら」閉所の「挨拶

まびくら運営委員長 大塚 忍

二〇二一年三月十一日、二週間ぶりにまびくらを訪ねました。わたしが初めて真備を訪ねたのは二〇一八年七月二五日。日本基督教団から派遣された野田沢牧師と二週間前に起こった西日本豪雨の被災状況の視察のためでした。井原鉄道の高架の周りには、被災された方々がつかっていた生活用品が山積みになっていました。家屋には泥が上がり、車も至るところに放置されていました。二〇一一年三月十一日の東日本大震災と同じ光景が、この地にも広がっていました。それから、ボランティア、まびくら運営委員会の会議のため、延藤牧師の歌声喫茶に参加するため、コーヒーを飲んでスタッフや地域の方と話をするため、何度となく、岡山から車を走らせてまびくらを訪ねてきました。

二〇一八年七月十三日（金）岡山市内において超教派で会議が行われていました。

この会議において、福音派で構成される「岡山県宣教の集い」が「岡山キリスト災害支援室（岡キ災）」を設置し、復興支援のボランティア活動を行うことを決定したので、後に、東中国教区は、「岡キ災」と共にこの働きを担うことになります。十二月には「岡キ災」の働きは新たな局面を迎え「まびくら」を拠点に活動がなされるようになりました。この時から、まびくら運営委員会は毎月一度まびくらで行われるようになりました。また、わたしは岡キ災の代表の草井牧師（岡山めぐみキリスト教会）とも毎月会って、ミーティングを続けてきました。同じ主を信じる友と一緒に、復興支援を担うことができたことに励まされ、大きな支えをいただきました。二年前、わたしはまびくら閉所式において、『まびくらしのぬくもり』を取り戻すために、働かせていただこうとしています。この地に生きておられる方、この地でも一度生きようとされる方、この方々が歩まれるスピードを同じスピードで歩くことなしには、その働きは担うことはできません」

と式辞を述べさせていただきました。しかしそのように歩むことができなかったかもしれませんが、反省すべきことは多々ありますが、神様に委ねるしかありません。

東中国教区の真備での働きは二〇二一年三月二〇日のまびくら閉所をもって終了します。しかし教区は今後も、これまでに交わりが与えられてきた団体と共に、真備の方々と共に歩んでいくことを決定しています。皆様にこれまでの働きを覚えて祈られてきたことに心から感謝いたします。またこれからの歩みを覚えてお祈りいただければ幸いです。



2021年3月20日 まびくら閉所式

「カルトについて」の学習会」報告

教区社会委員会委員長 延藤好英



コロナ禍の中、学生たちはステイホームで、孤立しがちです。そんな中、カルト

の勧誘が、ソーシャルメディアを通して活発に行われているようです。そんな状況の中、教区社会委員会は、改めてカルトについての学びが必要と考え、今回の学習会を開催しました。

二〇二〇年十一月三日(火)午後一時半から三時半迄の二時間の会でした。会場は、倉敷教会をお借りしました。講師は、玉野教会の山本博之牧師と日本同盟基督教団倉敷めぐみキリスト教会(高山正治牧師)の今村由美子さんでした。参加者は、十三教会二十一人でした。

山本牧師は、エホバの証人の歴史や教義について問題点を示してくださいました。みなさんの家庭にエホバの証人が来られた場合には、愛をもってはっきり断る方法と、

証しの機会と捉えて自らの信仰の証しをするという二通りの対応がありますが、どちらにしても、是非その人のために祈ってくださいと語られました。

今村さんは、御自身が統一協会の青年部に所属しておられた経験から、その信仰の問題点について語ってくださいました。特に、神さまと自分との間に、指導者が入っていることにより、自分で物事を決定することができなくなる問題点を示されました。また、人間の反逆のために泣いている神さまを慰めるために、自分が神さまと人に奉仕しなければならぬ、そうして初めて神さまに認められるという信仰理解のしんどさを語ってくださいました。そして、マインドコントロールから解放されるために、**①聖書を体系的に学ぶこと、②日常生活の中での自己選択、自己決定の訓練、③家族関係、社会関係の修復が有効である、**また一つの状況に対して、様々な考え方があり、それに従って様々な感情が引き出されることを確認していく作業が御自分にとっても有効であったと紹介してくださいました。

エホバの証人(ものみの塔)、統一協会

(天の父母様聖会)だけでなく、摂理、新天地、クリスチャントゥデイ、タラップンなど沢山のカルトがあり、サークル活動などに扮して、正体を隠して伝道しているカルトもあります。「日本脱カルト協会」や「カルト110番」といったホームページでご確認ください。



学習会の様子

「教師と信徒の

合同研修会」報告

教師部委員長 山本博之

二〇二一年三月八日（月）に行われた「教師と信徒の合同研修会」は新型コロナウイルス感染症拡大の収束が見通せないため、リモート（ZOOM）形式の研修会となり、全講演を教師と信徒が受講する形で、担当者も含めて三十一名が参加しました。

開会礼拝で宮本裕子牧師の「ともし火はやってくる」（マルコ四章二一～二三節）と題し、「ともし火」はイエス・キリストであり、コロナ禍も主は御言葉とご臨在をもつて私たちのもとに来て、共にいてくださると説教してくださいました。

引き続き、「コロナ禍によって



倉敷教会から配信

見えてきた教会の課題とその展望」をテーマに関西学院大学神学部教授の中道基夫先生にリモートでご講演いただき、パワーポイントを用いて分かりやすく、また、ユーモアと愛を持って真剣に教会への辛口評価も語ってください、質疑に応えてくださいました。

午前の講演は、教会が直面している二つの課題について。①聖日厳守主義がコロナ感染症拡大により崩れてしまった。教会は、どのように礼拝を守り、御言葉を届けるかを考えなければならない。②教会の高齢化という課題は組織の高齢化であることに気づかなければならない。今の教会は発展期・安定期を経て、減少期または変化を求めない衰退期にあるのではないだろうか。今後、復興期を迎えるためには、これまでの考えや仕方を一旦リセットして、新しいミッションを考えるチャンスであると提言されました。

休憩を挟んだ午後の講演は、コロナ禍での仏教界の対応や取り組みについての紹介に始まり、「ポストコロナの展望」と題し、教会に集えない状態の中で説教の原稿を読む、音声を聞くという礼拝が

続き、人に会わない会えない中で、どう牧会するかなど、新しい礼拝論ではなく、むしろ礼拝の本質を考え直すときではないか。教会のオンライン化を本気で考えてはどうかと提言くださいました。

今回、教師と信徒が共に学び・考え・繋がる新しい場所を作れたことに、新しい可能性を感じています。

最後に、配信会場の倉敷教会の皆様、配信操作や接続に関する参加者からの問い合わせ対応を担ってくださいった中井大介牧師に、心より感謝いたします。



リモートで参加

二・一一集会(平和集会)報告

岡山県東部地区

地区長 山本博之



2.11 集会開催の様子

二〇二二年二月一日(木)「二・一一集会」(平和集会)が日本基督教団岡山教会で開催されました。一昨年までは、岡山県東部地区、岡山キリスト者平和の会、公益財団法人YMCAせとうち、カトリック岡山鳥取地区(平和推進)、岡山ナザレン教会、岡山バプテスト教会が主催となっていました。今年度も昨年度に続いて、岡山県中

部地区と社会委員会が加わった開催となりました。

六月に行われた第一回の実行委員会の時には、日本各地で新型コロナウイルス感染症が拡大しており、年度内の収束は難しいと感じたため、リモート形式での研修会が出来ないかと検討しました。実行委員のほとんどがネット配信に不慣れなため、無謀な挑戦にも思いましたが、ネット配信環境や設備が整っている岡山教会のご協力が得られ、参加申し込みは会場とリモートのどちらかを選択できるようにいたしました。

講師は、吉田隆牧師(神戸改革派神学校校長)、松浦悟郎司教(名古屋教区司教)、土居弘幸医師(岡山大学大学院特命教授)の三名で、土居医師は会場、それ以外の二名の講師はリモートでご講演いただきました。参加者は、会場三七名、ZOOM二九名、計六六名と例年以上の参加がありました。

テーマは「コロナ禍の社会におけるキリスト者の使命」で、吉田牧師は古代教会の司教たちやマルティン・ルターが、疫病に恐れている信徒たちに語った言葉や行動などを紹介され、「災禍における教会の歴史から学ぶ課題」について、松浦司教からは、コロナ感染防止を掲げながら不正な圧力をかけている例などを示し、「全体主義

傾向下におけるキリスト者の使命」について、土居医師からは、新型コロナウイルスの特徴、感染対策、ワクチン接種の必要性など「コロナを正しく恐れる、終息へのプロセス」についてご講演いただき、最後に参加者からの質問に答えていただきました。

この会を開催するにあたり、特に会場参加者の感染予防対策のために、岡山教会と講師の土居医師に多大なご協力をいただき、また、岡山メディアサポートの金田正弘氏がボランティアで映像配信操作を担ってくださったこと心から感謝いたします。



リモート配信を用いて

教会紹介

・児島教会・

牧師 笹井健匡

児島教会は、三月二十九日で教会創立七三周年を迎えました。前史にあたる味野教会から数えるともっと長い歴史を有します。笹井健匡牧師、平島禎子牧師を迎えて七年になりました。礼拝出席者は、十名前後です。コロナ禍にあります、会堂にも恵まれて、感染対策をしながらも、礼拝その他の集いを何とか続けることができています。感謝をもって、厳しい状況にある教会を覚えながら歩みをすすめています。



児島教会の会堂

御多分に漏れず、児島教会も高齢化がすみ、一番若い信徒は六十代半ばです。だいたい三十年以上、同じメンバーです。ここ数年でも、天に帰られた方、施設に入られた方、病院に入院されている方が多くなりました。正直言って寂しい思いもありますが、基本的に一同笑顔で楽しく教会生活を送っています。

二〇二〇年は、コロナ禍のため、例年通りには行かないことも多くありました。イースターでは聖餐式を中止しました。また礼拝後の愛餐会も茶話会に変更しました。いつもは一品持ち寄りのバイキング形式で楽しい食事会でしたが、こればかりは仕方ありません。また聖徒の日・召天者記念礼拝も例年は遠方より多くの方々が出席してくださいますが、今回は、ご自宅で覚えていただく旨案内することになりました。それでも二組のご遺族が出席されました。複雑な思いを持ちながらも、天にある信仰の先達の姉妹兄弟に思いを馳せ、会堂での記念礼拝後、墓前で納骨式・墓前礼拝をささげることができました。

十一月には野外礼拝を鷺羽山で行うことができました。展望台まで特別に車で行かせてもらいました。たまたま来られた新見

教会の二人の若い姉兄も出席して下さり、平島先生のメッセージを受けて、心も体も開放され、その後各自用意したおいしいお弁当をいただきました。山頂に登って大きな石の上から見渡した三六〇度のパノラマは、ひとときわ美しい大自然の息吹を感じることができ、神さまの創造の業にあらためて感動しました。

大変なことも多いですが、神さまのご計画を信じ、互いに励ましあい、助け合いながら、これからも笑顔で歩んで行きたいと思っています。



鷺羽山での野外礼拝

按手礼式

「按手の重み」

久世教会牧師 宮本裕子

二〇二〇年十一月二十四日(火)、私は按手をいただき正教師に任職されました。久世教会に遣わされて早や三年になります。その間、聖餐式が行われたのは、わずか三回、交換講壇が行われた時だけです。でも、これからは毎月聖餐式を行います。また昨年のクリスマス礼拝では、二名の受洗者が与えられました。新米牧師のコチコチの緊張感の中、二名の兄弟姉妹が無事に、神の家族に加えられました。主に感謝いたします。

*按手礼は教団が正教師を認証する式である。按手は、手を置くことを意味し、

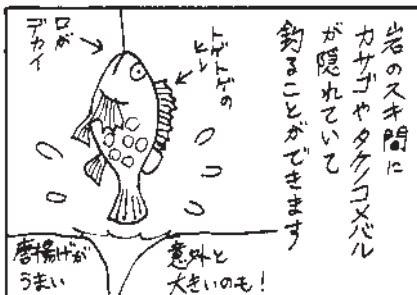
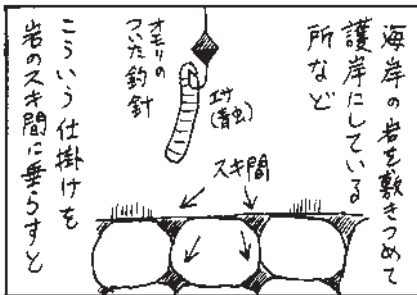
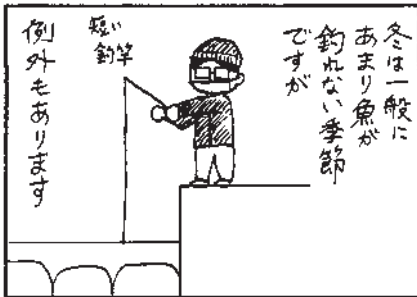
聖霊の注ぎ、神の賜物の授与を示す象徴的行為として祈りと共になされる典礼行為である。と、「日本基督教団 式文」に明記されています。

この日、久世教会から十二名、他から十七名、計二十九名の神の家族が出席くださり、午後一時、久世教会礼拝堂にて、教区議長大塚忍牧師の司式により、按手礼式が始まりました。『教会に仕えることが神の召命』によるものであり、『正教師と



按手を受けた宮本裕子師

隠された宝



しての職務』を誠実に果たすことを誓いますか。」と問われ、私はそれを誓いました。その後、先輩牧師十一名の手が私の頭に置かれて、正教師に任職されました。

この日、わたしの頭に置かれた手は、実に重たかったです。この日の真摯な気持ちを忘れることなく、生涯、主と教会にお仕えしたいと願っております。東中国教区の皆さま、今後共よろしくお願いいたします。

編集後記

新型コロナウイルスの対応に迫られて早や一年が過ぎました。人と人とのつながりを結ぶ「まびくら」の働きも新型コロナウイルスの災禍の中にあつて苦心されたことと思いますが、閉所の時までその尊い働きに尽くされたことに感謝の思いです。また、教区・教会の営みにおいても多くの制限を余儀なくされました。一方で様々な工夫を重ねて新しい方策も打ち出されていきました。特に、リモート方式での礼拝・集会の導入は、一長一短があるとはいえ新しい展開の可能性を示したと言えるのではないのでしょうか。まだ苦勞と忍耐の時は続くかもしれませんが、練達と希望に至る時を憶えて歩みたいと願います。

(W)

★ハラスメント相談窓口★

毎月第三水曜日 午前九時～午後九時
電話番号 ○九〇―一三三〇―一八七三〇